

授業探訪

総合系科目・多彩な学び

「RSL- ローカル（地域共生）」 SOCIAL & PUBLIC 22世紀をつくる人材を育てる

立教サービスラーニングセンター兼任講師 加賀崎 勝弘

① RSL とは何か？

「立教サービスラーニング（RSL）」とは、2016年度より立教大学の教育理念を体現した科目として、全学共通科目で始まった、学習を通じて社会の担い手としてのシティズンシップを磨くプログラムである。立教大学のオフィシャルシンボルには、楯のマークの中央に、ラテン語で「PRO DEO ET PATRIA」と記されている。この標語は、「普遍的なる真理を探究し（PRO DEO）」、「私たちの世界、社会、隣人のために（PRO PATRIA）」を意味する。すなわち、広い視野に立って物を見て自分の力で考え、当事者、市民、他の専門家などと共に困難な課題を解決する意欲と力を持つ人材のことを意味する。

RSLは、「世界・社会・隣人」と実際に交わりながら、社会の現場も「教室」として捉える、新しい「学修」スタイルの科目群である。

RSL科目では、基本的な流れとして、実際の社会での体験学習（実習）の前後に、課題設定や仮説設定、理論的な知識の導入等を行う「事前学習」、体験を学問的に意味付ける作業や自分自身の今後の行動につなげる「事後学習」を行う。また、RSL科目には、【講義系科目】と【実践系科目】の2種類があり、いずれも、社会で役立つ技法やスキルの修得に重きを置いて、社会の中で自分がどのように生きていくかという視点や姿勢を自覚的に養い、これに基づいて、身近な組織、地域やコミュニティ等に向かって働きかけ、行動する力を養うことを重視する。

今回、私が担当したのは、【実践系科目】である。これらRSLの理念、目的を体現すべく、授業のテーマは、【SOCIAL & PUBLIC（SDGsとグローバルの可能性・実践編）】として、以下のように構成した。

② 【SOCIAL & PUBLIC（SDGsとグローバルの可能性・実践編） とは何か？

■授業の目的

SDGsとグローバルの可能性を、実践の中から五感で学ぶ。SDGs Goal3「すべての人に健康と福祉を」/ Goal8「働きがいも経済成長も」/ 9「産業と技術革新の基盤を

つくろう」/11「住み続けられるまちづくりを」を自分ごととして理解し、課題解決に必要な視点や方法を身に付ける。同時にデザイン目線、プロデューサー感覚を養う狙いも含む。実社会の現場での活動と、教室における学問的な教育とを結合し、総合的な学習から22世紀をつくる人材を育てることを目標とする。

■授業の内容

活動場所は、埼玉県熊谷市。熊谷市は、日本最高気温41.1度を記録し、環境破壊への問題意識が強い市町村として有名だ。実際、環境省が推進する「熱中症予防声かけプロジェクト」主催の「ひと涼みアワード」において殿堂入りをしている。また、利根川と荒川が最接近しており水が豊富で、快晴日数も日本一である。要するに、水、土、太陽に恵まれた肥沃な土地で、食材の宝庫でもある。

SOCIAL & PUBLICとは、熊谷市にある有限会社PUBLIC DINERと埼玉福興株式会社の合同レーベルであり、活動体の名称である。PUBLIC DINERは、飲食店6店舗、ゲストハウスなどを運営し、地域を食でデザインする。また、熊谷圏オーガニックフェ

①	6/23	事前学習①：オリエンテーション（目標と方向性の設定、チームビルディング） 地域を食でデザインする（何を学ぶか？を知る①） →有限会社PUBLIC DINER 加賀崎勝弘（科目担当者）
②	6/30	事前学習②：農福連携とデザイン（何を学ぶか？を知る②） →埼玉福興株式会社 新井利昌氏（共同運営）
③	7/7	事前学習③：アウトプットをデザインする（何を学ぶか？を知る③） →随筆家 山本ふみこ氏（ゲスト・スピーカー）
④	7/14	事前学習④：SDGsの取組をデザインする（何を学ぶか？を知る④） →一般社団法人the Organic 小原壮太郎氏（ゲスト・スピーカー）
⑤	8/3 }	フィールド活動① 農福連携 土に触れる
⑥		フィールド活動② 農福連携 作物に触れる
⑦		フィールド活動③ 農福連携 太陽を感じる
⑧		フィールド活動④ 農福連携 水を感じる
⑨		フィールド活動⑤ SOCIAL & PUBLIC 繋がりをを感じる
⑩		フィールド活動⑥ SOCIAL & PUBLIC 持続可能性を感じる
⑪	8/23	事後学習①：ディスカッションとシェア
⑫		事後学習②：体験を構造化する＝プロデュース感覚を身に付ける
⑬	8/24	事後学習③：発表＝体験をアウトプットする
⑭		事後学習④：フィードバック（未来に繋げる）

スや埼玉県 63 市町村キーマン展などを展開し、埼玉県内を有機的なつながりで結び活動をしている。埼玉福興は、多様な「人財」活用の一つとして、しょうがい者を雇用しつつ、農業生産を行う農福連携の世界的企業となっている。この二つの会社が織りなすSDGs とグローバルの可能性を、実践の中から体で学ぶ。

具体的には、上記活動の拠点となる古民家をリノベーションしたゲストハウス『THE PUBLIC』に宿泊し、地域と関わりながら「農からはじまる暮らし」を体験する。仕事は、しょうがい者との農作業（水耕栽培、夏野菜の収穫等）や藍染、デザインワークショップを体験する。地域の中での各取り組みを通して、SDGs が日々の生活の中でいかに実践されているかを体感し、グローバルの可能性を五感で学んでいく。

【事前学習】

4 日間の立教大学学内での事前学習では、この授業で何を学ぶかを明らかにしながら、授業内でのシェアを大切にしたい。学生に何度も繰り返し伝えていたのは、「大切なことが抜け落ちるので論理的に話そうとせず、思ったことや感じたことをそのままシェアしてほしい」ということ。今の学生（特に立教大生）の特徴として、論理的に話すことが得意な、いわゆる「いい子ちゃん」が多い。内容は実に聞こえはいいのだが、どこかで借りてきたような話で、身体感覚が伴っていないことが多く、説得力に欠けると感じている。そこを脱皮するために事前学習では、自分らしく仕事をする 4 人のプロフェッショナルに触れながら、それを呼び水に、自分の内発的動機から発せられる言葉の大切さを感じてもらった。「こんな風で大学で話したのは初めてだ」という学生が多くいた。事前学習の後半では、100 文字随想の課題を出し、熊谷に引っ越したばかりのプロのエッセイストである山本ふみこさんが、一人一人添削してくださり、その感覚を強化した。また、内閣府、環境省、農林水産省などの裏に回り、各省庁の橋渡し役となっている、筆者の元同僚である小原壮太郎さんにも登壇いただき、国という単位も、実は身近であることを意識させた。

【フィールド活動】

5 日間の合宿でのフィールド活動では、テレビに一切触れず、コンビニエンスストアに一切行かず、宿泊先である『THE PUBLIC』と埼玉福興や PUBLIC DINER の農地を行き来し、オーガニックな食事を中心に健康的な生活を行った。事前学習で学んだことを実践している場を訪れ、現実社会がどうつながっているのかを体感したに違いない。しょうがい者に触れると同時に、多くのロールモデルとなる大人に触れ、自分のありたい未来を照らし合わせる。さまざまな人たちとの交流は、しょうがい者と健常者には境界がないことも体感させた。

事前学習から続けていたシェアだが、対話よりも、自らの発言によって、気づきが促進するように、オートクラインを大事にした。フィールドワーク後半では、自分の内側から出てくる言葉をしっかりと発することができるようになってきていた。そのことは、

同時に、より地に足が着き、「本当は何がしたいのか、何を求めているのか」といった自分自身を理解し始めることに通じる。ある学生は、自分の選択しようとする未来について吟味を始め、自分にとって大切なものを理解できるようになってきており、ある学生は、気付くことの怖さを感じ始めていた。これまでの常識を疑い、それに外れること、恥ずかしい思いや悔しい思いをして気付くことも多い。



自己との対話が、合宿中に進んでいった。

また、中盤から後半にかけて、それぞれの個性が出てくることと同時に、内発的動機を大切にすること、学生の行動に対してジャッジをしないこと、信じ切ることによって、より役割分担が起る。その結果、チームワークにも変化が生まれ、13名の学生の役割が変わり始める。最初は大人しめであったメンバーがむしろ活躍し始め、組織内での新たな自分に気が付き、リーダーシップとフォローアップが交差していくことも学びのひとつとなった。

5日間、ジャンクフードを一切食わず、土に触れ、太陽を浴び、身体を動かし、良く話すことによって、肌が綺麗になる、便通が良くなるなど体調が改善された学生も数多くいたのは、オーガニックの力でもある。良き身体には、良き精神が宿る。

【事後学習】

事後学習の前に、授業の成果を形にするため、東京大学が主催する『チャレンジオープンガバナンス 2022（以下COG）』へ応募の準備を始め、今回の体験を活かした課題を出した。課題は、以下の2点である。

1. あなたにとって、この授業での学習は、何をもたらしましたか？もしくは、もたらしそうですか？（文字数自由）
 - ・「立教サービスラーニング (RSL)」のサイトを再読してから、自分の言葉で伝えてください。
 - ・文章中には、この段階での、あなたにとっての『SOCIAL & PUBLIC』とは何か？も入れてください。
2. COGについて、PPTなどで、自分で企画書を作ってください。（枚数自由）

COG について、熊谷市から以下の課題が出されます。

テーマ：子どもに優しいまちの推進（子供の居場所を増やす）

今回の学びを活かし、子供（生活困窮世帯の児童生徒等）の～の貧困（～には、体験、関係性、希望 etc が入る）を補う場の創生について、① PUBLIC DINER のリソース、② 埼玉福興のリソース、③ あなたのリソース、④ 仲間のリソースを使いながら、何か、具現化できるアイデアを考えてください。希望があれば、授業外の取り組みとなりますが、行政と我々と組みながら、実験的に行うことも可能です。

また、課題解決や議論する上で、欲しいデータがあったら、教えてください。

※ 今回、逆のアプローチで、データからアイデアを導き出すことはしません。解決策を考えた後に、行政からデータを提供してもらいます。

「RSL」を通して学生が身に付けられる力として、

- ① 社会と向き合う、視点や視座
- ② 大学で自分らしく学ぶ姿勢とワザ
- ③ 社会を創り、支える一員としての責任感
- ④ 政治参加や仲間／地域の中で協働するためのスキル（対話、議論、コミュニケーション、文書化、プランニング、プレゼンテーション）

の4つを挙げているが、立教大学学内に戻り、事後学習では、上記の課題（子どもの居場所）を解決する方法を、各自プレゼンする時間を設けた。フィールドワークで体験した内容ずばりではなく、4つのリソースを用いて地域の課題解決を図り、行政に提案することを目的とし、①～④を自分で構築していく。体験を構造化し、自然とプロデュース感覚を見つけ、アウトプットし、未来につなげる。

また、課題では、自分でデータを探すことを課したが、あらゆる客観的なデータは、自分の体験・経験を元に活用することで、意味が変わる。COGがアイデアに磨きをかけるために提唱している3D（デザイン、データ、デジタル）をも超え、身体化した学生のプレゼン内容を統合した提案を行った。その結果、ファイナリストに残り、東京大学にて学生と共にプレゼンを行い、見事グランプリである総合賞を獲得した。今後は、学生の希望を募り、授業外の活動として、提案内容を実践していく段階に入る。

さて、ここでもう一度「RSLとは何か？」に戻る。RSLセンターいわく、「良いテーマに出会うには、世の中で起きている問題や、人によって意見が異なる社会的問題について、実際に体験し、考えてみるのが近道の一つ。そして、単に体験するだけで終わらせるのではなく、そこから大学で専門的に学ぶテーマを見つけ、人生のテーマに出会うきっかけとする、それがサービスマーケティング」であるが、「実社会で生きるために、一生モノの武器を手渡す」というよりも、自ら発見し獲得し、自分の人生をサバイバルできる方法を身に付け、同時に仲間も発見していく旅のような授業を来期も目指し、22世紀をつくる人材を育てたい。

③最後に

埼玉新聞等の取材から、学生の授業内（フィールド活動3日目）のコメントも紹介したい。

●法学部法学科 4年次 柳田遼太郎さん

RSLでの日々はとても充実していて、この3日間だけ切り取っても、学びや感動が大いにあった。社会見学、農業体験などを通して、実体験として肌でソーシャルファームの実情を知ることができた。そして、この貴重な体験は、コロナ禍によって失われた「社会を知る経験」、「交流」の場を取り戻すよい機会となり、（現時点でも）とても満足している。

熊谷市で夏の猛暑を体験し、それは私たちに環境問題を考えさせた。仕事や生活に直結しているがゆえに、熊谷市民の問題意識が高いのもうなずける。それとともに、解決には政府はもちろん、多くのアクターがさまざまな方法で取り組んで行く必要があると感じた。

食ではPUBLIC DINERで、健康的（オーガニック）でおいしいものを味わえた。その背景には埼玉福興会社の社員をはじめとする、しょうがい者、前科者、社会不適合者という存在が支えていることを忘れてはならない。彼らはさまざまな事情から失敗や苦勞をしてきたものの、生き生きとした姿で働き、成長し続けている。彼らがそのように前向きに生きるためには、彼らを取り巻く環境がいかに肯定的であり、彼らを受け入れようとしているかが重要となる。私たちが回ってきた場所では、それを可能にしていたように思われ、素晴らしいと感じた。

●文学部教育学科 2年次 三浦紗耶さん

とにかく東京に閉じこもってはいは感じられないような感覚をたくさん味わえる機会でした。表面的に農福連携について学ぶだけでなく、もっともっと深いところにある問題や喜びを目の当たりにしたり、いろいろなキャリアを積んでこられた大人の話を伺って、大学生である自分が何をすべきか考えるきっかけが溢れていたりと、楽しみながら大きく成長できました。私の1番の思い出は、大学入学当初から持ち続けてきた教師になるという夢を問い直すことができたことです。熊谷に来れば、遠い夢や目標を抱くより目の前にある自分のやりたいことに飛び込む面白さや、周りの目よりも自分の選択に自信を持つ強さについて学ぶことができます！

最後に、授業の後も「里帰り」と称して、何人もの学生が熊谷に訪れていることが、とてもうれしく思う。